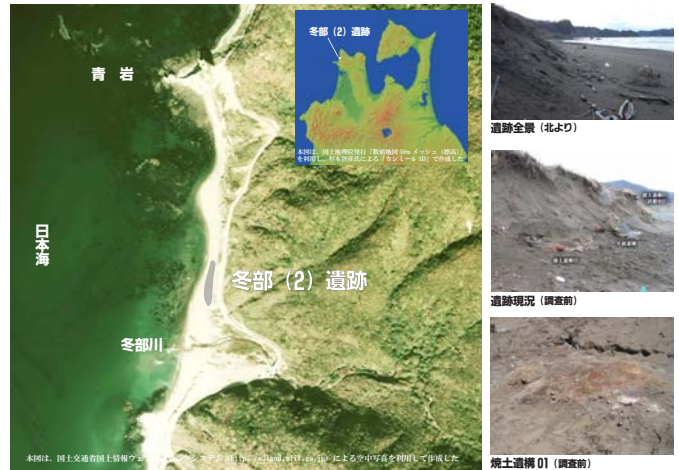




中泊町冬部 (2) 遺跡 ~ 製塩関連遺構の調査 ~

遺跡位置・調査経緯

遺跡は、中泊町小泊支所の北東約 3.5 km、冬部川河口右岸の海岸段丘・海浜に所在します。平成 16 年 12 月上旬の高潮により、海岸段丘の一部が削りとられ、石組遺構ならびに焼土遺構が偶然すがたを現しました。これらの遺構については、当初より近世文献等に記録された「塩釜」との関連が予想されましたが、波浪等による遺構破損が危惧されたことから、平成 18・19 年度中泊町教育委員会による記録保存調査が実施されました。



石組遺構

西（海）側を欠損するものの、東壁ならびに南北壁の一部、底面が残存し、現存長軸約 4m、短軸約 1m、壁高約 0.6m を測ります。角が僅かに弧を描くことから、隅丸方形を呈する水槽状の形態が推定されます。壁は径 20 ~ 30 cm 程度の礫（河原石）を積み上げ、粘土によって補強固着しています。また底面は、板状の礫を敷き詰めた上に粘土が貼られています。

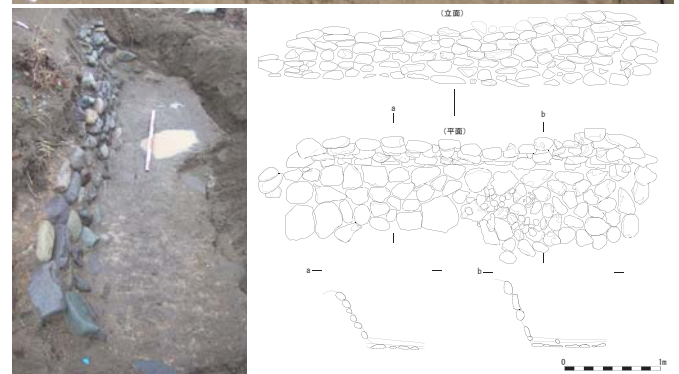
形態・構造からは、真水あるいは海水等の液体を貯蔵する「貯水槽」状施設とも考えられます。なお、石組遺構の北側に焼土遺構 02・炭化物層が確認されましたが、両者の関係については不明です。



焼土遺構 01 (試掘坑 01)

焼土遺構を中心に試掘坑を設定して精査を行った結果、多量の河原石（径 5 cm 程度）を包含する石灰粘土・焼土層が複数発見されました。構造的には不明の部分が多いものの、石灰粘土に小石を混合して構築された製塩用の「土釜（貝釜）跡」と推定されました。石灰粘土層の広がりには径 2 ~ 4m 程度の楕円形を呈し、複層にわたって検出されたことから、繰り返し構築された様子がうかがわれます。

「土釜跡」の操業年代については、遺構上層から出土した高台付の染付碗いわゆる「広東碗」の形態や窯道具痕から、19 世紀前半を下限とした時期が推定されます。なお「土釜跡」周辺より、釜の口縁部（釜縁）と考えられる遺物や、海獣類と推定される頭骨・背骨ほかの遺存体も発見されました。





小泊地区における製塩

小泊地区における塩釜の記録は、近世前期に遡りますが、近世後期から末にかけては旅人による紀行文が塩釜の様子を詳しく伝えています。寛政5年(1793)三厩方面から小泊に入った水戸藩士**木村謙次**の「ヤカタ石ヒヨベオリコシ内ナト二里ハカリノ無人ノ地只焼塩ノ小舎二三所アル所ヲ経テ小泊ニ至ル(『北行日録』)」という記載をはじめ、寛政8年(1796)小泊を訪れた**菅江真澄**の「青岩ノ崎、屋形石などしほがまふたつ過ぎて(『外浜奇勝』)」ほかから、折腰内~矢形石間に小屋掛けの塩釜があったことがわかります。

弘化元年(1844)に来訪した**松浦武四郎**は、紀行『東奥沿海日記』にて「此岬を廻て山に添て暫にシヲヘナイ 此処小湾にして上に田少し有。又海岸に小流有。側に塩がま有。年中此処にて汐を汲みて塩を焼くなり。」と述べ、現在の「冬部」に比定される「シヲヘナイ」の塩釜に関心を寄せています。

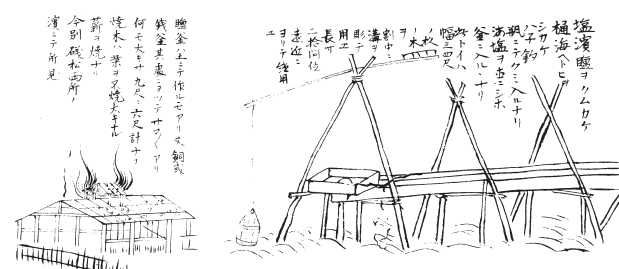
塩釜の構造については、**今別・磯松**の塩釜を記録した**比良野貞彦**『奥民図彙(天明年間)』では、「塩釜ハ土ニテ作ルモアリ又銅或銭釜 其処ニヨツテサマサマアリ 何モ大キサ九尺二六尺計ナリ」、また同じ頃の**黒崎**の塩釜について言及している**菅江真澄**も「このはまは海土、あななるのたかきにのほりて、はねつるへして寄来る浪をくみて筧になかし、**貝釜**におとしいれて鹽やきたり。」と述べていることから、3畳ほどの大きさの土釜や金属製釜であったことがわかります。

北林八洲晴氏は、『日本塩業大系』所載の史料を引きながら土釜について次のように説明しています。

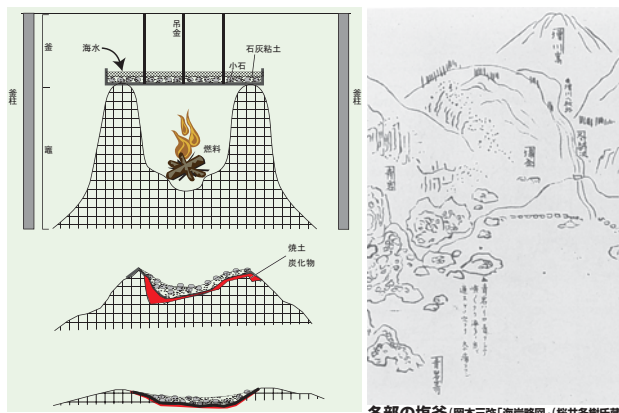
土釜(焼貝殻粉粘土釜)

土釜の分布は、東北、北陸、関東、東海すなわち東日本の海岸で、東京湾を除くと直煮製塩ないし自然浜の地域に分布した。その発生については明白でないが近世から明治期まで用いられたことは明らかである。構造は釣釜の形態で、原料は^{しじみ}蜆、^{あさり}浅蜷、^{はまぐり}蛤、^{あかざら}貝、^{ほたて}帆立貝、^{かき}牡蠣、^{あわび}鮑などを焼き、粉末にし、これに^{にがり}苦汁あるいは^{かんすい}鹹水を加えて粘土化したもの。大きさは縦横4mを大とし、小は4mに2.8mほどのものである。(中略)北陸方面では小石を混合した。(中略)方3cmに1個ずつの小石を並べ、小石の見えなくなる程度に粘土を塗り詰める。したがって厚みは3cm以上となろう。(中略)釜の寿命は行徳で約20日、大師河原で50~60日という。

(北林八洲晴 2003 『断章 青森の製塩跡考』)



比良野貞彦『奥民図彙(天明年間)』に描かれた塩釜



「土釜跡」復元図 冬部の塩釜(岡本三弥「海岸略図」(板井冬樹氏蔵)小泊村史所蔵)

これらから、土釜が明治時代前期まで使用されたこと、構造的に竈と釜に分かれること、木や竹・草本類等の心材に貝殻粉水等を練り合わせた石灰粘土を塗り固めて製作した吊釜であること、大きさは比良野貞彦等の記述に一致すること、耐久性1~2ヶ月程度であること、などがわかります。

とくに冬部(2)遺跡の「土釜跡」との関連で注目されるのが、北陸地方では石灰粘土に小石を混合するという点です。また全体の形状や釜縁の寸法も略一致するように思われます。断定はできませんが、小泊地区の塩釜は北陸の系譜を引いている可能性があります。

